

# 研究・評論部門選評

## 二つの評伝のダイナミズム

中島 国彦

井上隆史氏の『暴流の人 三島由紀夫』は、三島没後五十年を機に、書き下ろし評伝としてまとめられた力作である。決定版全集の完成にも協力され、残されたノート類にも目配りしている三島研究の第一人者の、多面体三島への熱い思いが各章にあふれている。三島の家系、若き日の習作の内実から始まり、冒険や失敗を繰り返しながら晩年の『豊饒の海』に至るまでの軌跡を、「虚無」「セバスチャン・コンプレックス」「全体小説」という三つの鍵概念を設定しつつ意味づける。生涯の諸体験と作品世界の相関を分析する手付きは着実に、最終章へ向かう記述の盛り上がりも印象に残る。明治以降の近代という時代そのものの歩みを一身に背負った一人の文学者の営為に注がれた著者の眼は、読者の心を打つ。

山田俊治氏の『福地桜痴』は、資料を駆使したオーソドックスな評伝で、これまでしっかりした桜痴の生涯の跡付けが無かっただけに、貴重な業績となっている。明治初期の新聞雑誌を丹念に閲読している著者が、幕末維新の時代に多方面に活躍した桜痴の一次資料を博捜しまとめ上げた努力は、高く評価される。明治の新時代において必ずしも力の発揮できなかった桜痴だが、外遊を含めたユニークな履歴や、劇作にも及ぶおびただし作品の意味付けから、近代文学の第一線に居られなかった桜痴の苦悩が、少しずつ浮かび上がる。井上氏の評伝とはまた違ったスタイルだが、労作の出現を喜びたい。

## 遠くまで行く

関川 夏央

井上隆史『暴流の人 三島由紀夫』（平凡社）は三島由紀夫研究第一人者が、そのさらに遠くまで行ったという印象を受ける。

『金閣寺』『鹿鳴館』そして短編「橋づくし」を発表し、また初めて半裸の男たちに混じって祭の神輿をかついだ一九五六年、三十一歳の若さで三島由紀夫は、その人生の南中時刻「亭午」を迎えた。十年後、「戦前と戦後の連続性の根拠」を探り出す必要に駆られた彼は、華々しくも傷ましい疾走を開始する。古典の引用とそのアイロニカルな再構築（井上隆史によれば「同時更互因果」を重ねて書き進んだ大作『豊饒の海』は「全体小説」であると同時に、死の跳躍への助走であった。四八年十一月二十五日から七〇年十一月二十五日まで、びったり二十二年の職業作家生活は意外に短い、まさに複雑・豊饒な時間であった。その人生を、特にその劇的な後半部を、実証的かつスリリングに記述できるのはこの人だけだろう。

山田俊治『福地桜痴』（ミネルヴァ書房）は労作である。よくここまで一次資料にあたった。その努力に感服する。

福地桜痴は、幕末の文久初年、安政条約による開港の延期交渉から明治五年出発の岩倉使節団まで都合四回、二十歳から三十二歳までの間の四年余を欧米諸国の旅に過ごした人である。それは当時の日本人としてまったく得がたい体験のだが、そこで桜痴は何を見、何に驚き、何を学んだか。あるいは何を学ばなかったか。彼が歴史に名をとどめ得た理由は、そのあたりから解明できそう。

## 文学研究としての評伝、二篇

兵藤 裕己

井上隆史『暴流の人 三島由紀夫』は、五百頁余に及ぶ三島の評伝である。本書によつて初めてあかされる伝記的事実は少なくないと思うが、たとえば、ノーベル文学賞を受賞した川端康成による三島への（微妙な）働きかけの裏話などは興味深かった。本書で意図されるのは、三島の初期作品から『豊饒の海』までの代表作をたどり、作品の背後にある精神と病理、虚無とコンプレックス、またそれと表裏の関係にある三島の「近代」批判や戦後体制批判の言説をトータルに（一冊の評伝として）捉えなおすことだろう。それから複数の論点を交差させながら、全体として、たしかに三島研究のすぐれたモノグラフが構成されている。

山田俊治『福地桜痴』は、近代の新聞・雑誌研究の第一人者による福地桜痴の評伝である。維新前後に四度洋行し、すぐれた語学力と海外経験を持ちながら、その能力を政界・官界では発揮できず、政府寄りの御用新聞の主筆になり、また欧化主義に乗るかたちで演劇改良運動の一翼をになう（片棒をかつぐ）など、明治期の政治・文化の動向を語るうえで逸することのできない人物だが、山田氏によれば、「時代を超えて評価されることはなかった」福地は、しかしそれゆえに「時代を映す鏡にもなる」という。抑制のきいた文体で福地の生涯と文業をたどり、井上氏の著書とはべつの意味で、すぐれた評伝研究になっている。